

『ルーツ』の中のサツマイモ

付 王のイモと奴隷のイモ／奴隷船の食糧

川越いも友の会理事 井 上 浩

アメリカ合衆国建国200年祭の年に発表され、ベストセラーになった黒人作家、アレックス・ヘイリー（Alex Haley）の『ルーツ』（“ROOTS” 1974）にも僅かながらサツマイモがでてくる。

舞台は18世紀後半のバージニアの白人経営のプランテーション。安岡章太郎・松田銑両氏共訳の『ルーツ』（1977、社会思想社）で、それがどういう時に、どのような形で出てくるのかを探ってみたい。

『ルーツ』の主人公、クンタ・キンテは1750年春、西アフリカのガンビアの小村、ジュフレで生まれた。

そこでは少年たちが17歳になると、村の外の一軒の宿所に入れ、4か月間、成人になるための厳しい訓練を施した。クンタもそれを受け、大人社会の一員となった。ところがその直後、木を伐りに入った森の中で白人の奴隷狩りにさらわれ、奴隷船に積み込まれてしまった。

140人の奴隷を乗せた船はアメリカに向い、メリーランド州のアナポリスへ入った。奴隷はここで即売され、クンタはメリーランド州の南、バージニア州の農園主、ジョン・ウォーラーに買われた。

敬けんなイスラム教徒であり、アフリカ人としての誇りの高かったクンタは脱走しか考えなかった。1年に4回も脱走を試み、いずれも失敗した。4度目は逃亡者追跡を業とする白人のならず者と戦い、片足を切り落されてしまった。

瀕死のクンタを救ってくれたのは、医者であり農園主でもあったウィリアム・ウォーラーだった。彼はまたジョン・ウォーラーの兄でもあった。クンタの傷が直ると義足を作ってくれた。そしてびっこになってしまったクンタを弟から買い取り、手元へ置いてくれた。

クンタの仕事は、だんな用の菜園の管理だった。そこには黒人の女奴隷、ベルが毎日やってきて野菜を取り、籠に入れた。ベルはだんなの館の料理女で、野菜の入った籠をクンタに料理場まで運ばせた。

この農園に来て2度目のクリスマスの時だった。クンタはだんなの館の台所にあったごちそうの山をのぞいて驚いた。第54章にその情景がこうある。

「ベルの深鍋も平鍋も、鍋という鍋が、薩摩芋や兎の肉や豚の焙り肉で煮えくり返り、七面鳥、アライグマ、フクロネズミなど、クンタがこの国にくるまで聞いたことも、見たこともなかった動物の肉の料理が何皿もずらりと並んでいた」

白人農園主のクリスマスのごちそうに、サツマイモもあるところが面白い。

1775年に独立戦争が始まり、1783年に終わった。戦争が終わった時、クンタはすでに34歳にもなっていた。クンタはその頃からだんなの馬車の御者になり、方々へ出かけるようになったので急に見聞が広がった。

だんなの料理女、ベルはクンタより何歳か年上だった。彼が彼女を嫁にしても良いと考えるようになったのも、その頃からだった。

それを知ったベルは、喜んで彼を自分の小屋に呼び、夕食をふるまった。第64章にその情景がこうある。

「最初は毎週1度くらい、それから毎週2度、ベルはクンタを夕食に招待した。クンタはともすれば遠慮しなければならぬと思いがちでも、どうしてもそれを断れなかった。

そしてベルはいつもクンタがガンビアにもできると話したものの、例えばササゲ、オクラ、南京豆のシチュー、甘藷^{かんしょ}のバタ焼きなどをこしらえてくれた」

『ルーツ』には、それまでガンビアのサツマイモのことはでていない。アフリカへの一刻も早い帰還が夢のクンタのことだ、話の中に故郷ジュフレのサツマイモのこともよく出てきたのであろう。

彼がベルと一緒にになったのは39歳の時だった。

ベルはやがて女の子を生んだ。1790年9月12日の早朝で、キッジーと名づけられた。だがその命名をめぐる一悶着あった。

クンタはイスラム教徒であり、マンディンカ族の一員であることを今でも誇りにしていた。一方、ベルはキリスト教を信じていたので、夫が異教徒とアフリカのやり方で名前を付けることには反対だった。二人は言い争い、激怒したクンタは外へ飛び出した。だがなんにもすることがない。身をもてあましているうちに昼になり、腹がひどく減ってきた。昨日

の夕方、ベルが産気づいて以来、なんにも食べていなかった。だが家へは帰れない。納屋の裏に回り、なまのサツマイモをかじってがまんした。第68章にこうある。

「そこには最近とり入れたさつまいもが積んであった。上に麦わらをかぶせて干してあった。

彼はその山から小さいのを4つ拾って——われながらつまらないと思いがちながら——生のままかじって空腹をごまかした」

やっと気が静まったクンタは、家にもどるとしぶるベルに「キッジー」という妙な名前をむりやり承知させた。それはマンディンカ語で、「お前そのままおれ」という意味だった。奴隷の家族は、だんなに親子ばらばらに売り飛ばされることを一番恐れていた。「キッジー」には、そういうことのないようにという願いがこめられていた。

ウィリアム・ウォーラーだんなの両親は近くに住んでいた。大農園主だったので、折にふれて盛大な晩餐会を催した。

むろん、だんなも招かれるので、クンタは何度、だんなを馬車に乗せてそこへ行ったか分からない。

御者は主人を館に送り届けてしまえば、パーティが終るまで用がない。そこでクンタは顔見知りの黒人奴隷の料理女、ハッティがいる館の料理場に入り、晩餐会用の豪勢なごちそうをつまんだ。そんなある夜の情景が、第75章にこうある。

「クンタが挨拶かたがた何か食べさしてもら

うために、料理場の戸口へ顔を出すと、ハッティは中へ入れと招き入れた。そこでは彼女と助手の4人の給士女とが晚餐の支度を終わらとしていた」

「クンタは彼女の出してくれた皿一杯山盛りの料理に手をつけはじめていた。そして彼女がズラリと並んだ大皿に、忙しそうに盛りつけている美事なロースト・ビーフや焼きハムや、七面鳥や、鴨を感心して見物していた。

彼がちょうどバタ入りのスイート・ポテトを一口はおばったとき、4人の給士女が揃って、空のスープ皿とスプーンとをかかえて、

「ギャギャ騒ぎながら台所へ帰ってきた」

『ルーツ』は120章からなる長編だが、このあと、サツマイモはもうどこにもでてこない。

物語の主人公もアフリカ人、クンタからその娘、キッジーへと移る。更に闘鶏訓練士ジョージ、鍛冶屋のトム、その娘シンシア、身内で初めて大学に入り、大学教授となったバーサへと移っていく。

そしてバーサの息子の一人が、『ルーツ』の著者、アレックス・ヘイリー（1921年生まれ）その人だった。

付 王のイモと奴隷のイモ

アフリカから新世界へ大量の奴隷が送られていた時代に、欧米の奴隷商たちが、どのようにして奴隷を買っていたかについては多くの記録がある。

だが奴隷を運ぶ船が、奴隷用の食糧をどのようにして調達していたかについてまで紹介している本はほとんどない。

そうしたなかで世界屈指のアフリカ通といわれるイギリスのジャーナリスト、Basil Davidson（1915～）の“BLACK MOTHER”（1961）はさすがだ、一例だけとはいえギニア湾岸での実例をあげている。内山敏氏訳の『ブラック マザー』（1963、理論社）によると、こうなる。

「デルタ地帯の交易の複雑さについては、1699年のニュー・カラバルにおける価格について、ジェームズ・バーボットが行なった報告から、なにがしかがうかがわれる。

彼はコンゴ経由でカリブ海に向う航海のため、船の食糧を買い集めており、イモ5万個

を必要としていた。

結局、彼はこれを『王のイモ』——第1級品——60個について標準型の地金棒1個、『奴隷のイモ』150個について地金棒1個の値段で買い入れた。

水1樽は標準型の鉄の環2個の値段だった」（208頁）。

ジェームズ・バーボットはイギリスの奴隷商。アフリカの海岸地帯に割拠していた首長たちから奴隷を買い付けては新世界へ運んでいた。

ニュー・カラバルはニジェール川のデルタにあった都市国家。当時は奴隷貿易で栄えていた。

さて問題は彼が必要とした「イモ5万個」のイモだ。アフリカ在来のヤムイモか、新世界から入ったキャッサバ、またはサツマイモが考えられる。

ただ同書には、バーボットの報告からの別の引用があり、「海岸で船に給水し、木材を

供給する権利を得るためと、航海中奴隷に食わせるヤム〔やまいもの一種〕のため、価格をきめなければならなかった」(99頁)とある。

これからみると、彼のいうイモはヤムイモだったようだ。

集ったヤムには大きな見事なものと、ちいさな貧弱なものがあってらしい。それを「王のイモ」と「奴隷のイモ」の二つに区別して

買い付けているところが、いかにも奴隷商らしい。

当時ギニア湾岸では銕貨はほとんど使われていなかった。首長たちは銃と弾薬、タバコ、ラム酒などを要求したが、一般的には鉄や銅の長い地金とか真鍮の鉢などで交易が行なわれていたという。

それにしても1船に「イモ5万個」とは大変な量だ。

付 奴隷船の食糧

アフリカから新世界へ送り込まれた黒人奴隷の数は、控え目に見積っても1,500万人は下らないといわれている。

奴隷たちは大西洋岸の奴隷集積所に集められ、帆船にすし詰めにされて送られた。航程は一番短かった西アフリカのガンビア川河口から、西インド諸島のバルバドス島までで順風に恵まれれば3週間だった。ただ、たいていの航路はもっと長かったし、^{なづ}嵐や嵐も多かったから、はるかに日数がかかった。そしてなかには、大西洋横断に3か月もかかった船があった。

その船中で奴隷はなにを食べさせられていたのだろう。大西洋奴隷貿易史の数少ないガイドブックとされているものに、Daniel P. Mannixの“Black Cargoes, A History of the Atlantic Slave Trade 1518-1865”(1962, New York)がある。

幸い土田とも氏による訳本、『黒い積荷』(1976, 平凡社)があるので、それで当てみよう。

食事は1日2回。天気が良ければ甲板で与えられたが、その様子がこうある。

「9時頃には奴隷は最初の食事を与えられる。奴隷がウインドワード海岸の出身者なら、食事は煮た米、キビ、トウモロコシで、船員の割り当て分から取った2-3個の塩漬け肉で味付けされていることもある。

ビアフラ湾の出身者なら、煮たイモが与えられる。

しかしコンゴやアンゴラの出身者はマニオクやバナナを好む。

食物と一緒に奴隷全員に半パイントの水が与えられる」

「午後3時か4時になると、奴隷は2度目の食事が与えられる。それは往々にして初めの食事と変りないものだった。

アフリカ産食物の代りに、ヨーロッパで一番値の安いかいば用のソラマメが出されることもあった。

ソラマメはどろどろに煮て、水夫が『よだれソース』と呼ぶヤシ油と小麦粉と水とトウガラシの混ぜ物をかける。大部分の奴隷、特にイモやマニオクを常食とした奴隷はこれを嫌った」

350年にもわたり、様々な奴隷商人が関係

した奴隷貿易のことだ、奴隷船の食事にバラツキのあったことは当然であろう。ただ基本的にはこんなものだった。

ところでここにある「イモ」とは、なんであらう。

アフリカ在来の子芋イモである「ヤムイモ」か、新世界から入った「サツマイモ」のいずれかが、または両者が考えられる。

そして「マニオク」は新世界原産のキャッサバだ。

コロンブス以後、アフリカに入ったトウモロコシやサツマイモ、キャッサバなどが奴隷船で新世界へUターンしていることがよく分かる。

ところでこの粗末な食事にも、一つだけいいことがあった。

奴隷船の白人水夫に支給されていた食糧は、塩漬け肉と航海用の乾パンだけだった。そのため航海が長引くと、ビタミンCの欠乏からくる壊血病に悩まされた。

むろん黒人奴隷でもそれにかかった者はあったが、その割合は低かった。

サツマイモにビタミンCが多くあることはよく知られているが、バナナやヤム（ヤマイモ）、ゆでトウモロコシなどにも、それが僅かずつだが入っているからだ。

Mannixによれば、イギリスのような強大な海軍国でも、壊血病予防のために1日1口のレモン・ジュース（実際にはライム・ジュースで代用）を軍人に支給するようになったのは、やっと1795年になってからだったという。

需要拡大推進事業の検討

財団法人いも類振興会 秋元 喜弘

平成4年2月20日、東京麻布グリーン会館において昭和63年度より平成3年度にいたる間実施された需要拡大推進事業（国産いも類加工食品等需要拡大推進事業）の実績検討会が開催された。本事業の計画・実施にあたり格別のお導きをいただいた農林水産省畑作振興課から市之宮課長、いも類班担当上野課長補佐、横田農蚕園芸専門官、来島いも類係長が出席され、事業を実施した北海道・茨城・千葉・宮崎および鹿児島各道県の担当者ならびに財団法人いも類振興会関係者、また毎年東京目黒不動尊で行われる甘露まつりに盡力されている昆陽先生遺徳顕彰会の二瓶会長が

参集した。

ジャガイモは全都道府県において、またサツマイモは東北南部以南の都府県で広く栽培されているが、本事業を実施したのはでん粉を生産している上記5道県であった。しかし同じいもにつながる仲間が集まり、情報と意見をかわし得たのは今後のいも産業発展のためきわめて有意義であった。

■ いも類生産消費の現況

上野課長補佐よりいも類生産消費の現況について資料にもとづく説明があった。全国的にみるとサツマイモについては単位あたり収量が10アールあたり2,000～2,300kgと、戦